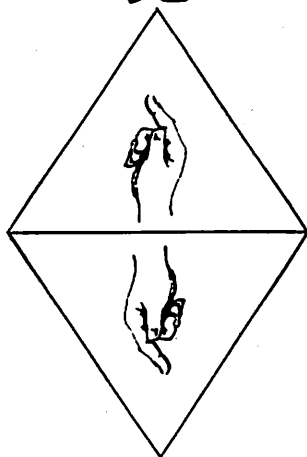


底点の発見



深津文雄

かにた婦人の村施設長

人間というものは、考えてみると、おかしな動物で、数かぎりない錯覚にみちている。そのなかでも、最も決定的なものの中に、底辺に関する錯覚がある。

いつのまにか、我々は自分を三本の直線のなかに押しこめていく——上すぼまりの、裾ひろがりの、二等辺三角形のなかに……。

というのは、いつも、われわれが、社会のことを語るとき、上のほうは頂点とよぶ。それに対して、下のほうは底辺とよんで、だれも、それを疑わない。

偉い人はすくないが、ダメな人間はウヨウヨしている——とでも、いいたいのだろうか？

まあ、頂点のほうは、それでもいいとしておこう。が、底辺のほうは、それではいけない。その理解は誤っている、危険である——と、ぼくは言いたかったのである。

まともに見る気もなしに、われわれが、漠然と底辺とよんでいるところは、実は、そこに降りてみると、考えていたよりは凸凹で、奥深く、下には下があっ

て、ぼくには、さながら、もう一つの逆三角形のように感じられる。

そして、上の三角形が、上すぼまりであったと同じように、下の三角形も下すぼまりで、そのドン詰まりは、ただ一つの点になる——そこを、ぼくは「底点」とよぶことにした。

こんな言葉は、おそらく、どの字書にものつていないと思うが、社会の底辺というのは錯覚で、その代わりに、社会の底点というべきではないかと考えたからである。

なぜ、このような、こまかい言葉のしにこだわるかというと、底辺という考えかたでは、そこが一番大きく感じられ、とても、すこしばかりの頂点をくずしてきても埋めきれない——という、絶望感に陥ってしまう。

ところが、底点ということになると、だれか一人いって、手をとれば、解決がつく。やってみよう——という気になる。大勢でおしかける必要もない。大勢ではかえって窮屈……。

この、みんなが見落としている小さな

場所を見つけることが、福祉事業学の第一課なのである。

ところが、底点という考えがないばかりに、むやみやたらと福祉予算をバラ撒いている、要りもしないところに……。

それも上のほうから……。これでは、いくら税金をあげても、足りっこはない。そして効果はあがらない。

これより下はない——と、ハッキリ言いきれるところを、まず見つけ、そこから先に埋めていけば、少しで足りる。そして、確実に効果はあがる。

そんな解りきった、単純な数学を、どうして、だれも考えつかなかったのだろう——と、反省してみると、人間が、誰も彼も、上の三角形だけ見て、頂点志向ばかりしているから、その価値観でしかものをみないからであろう。

なにもかにも、ただ頂点志向型の、一方交通におわってしまっている。学問も、勤労も、文化も芸術も、政治も経済も、宗教も福祉も……。

そうだ。福祉さえもが、頂点志向の価

値観のなかで処理されている——それが現代の一番大きな錯覚なのである。底点を見落とした福祉、底点を見ながらない福祉、底点を優先することのない福祉——これは福祉とはいえない。

イエスは奇しくも言った——「これらの最も小さいもののひとりにしなかつたのは、私にしなかつたのである」(マタイ二五・四五)と。

ぼくのいいかたですれば、底点を優先しなければ福祉にはならない——ということである。

この場合、「私」とは、いったい誰だろう？「主」とよびかけられているところの「王」、そして、それは、この国の主人でもなく、天から降る、終の日の審判者「人の子」なのだと言っている。すると、ひっきりやうするところ「神」なのだろうか？

神にしよう、神にしよう、上ばかりみて一生懸命になっているが、それが一向に神にとどかない——それは、この下の下、最低ドンづまりの一点をミスして

いるからであるという。

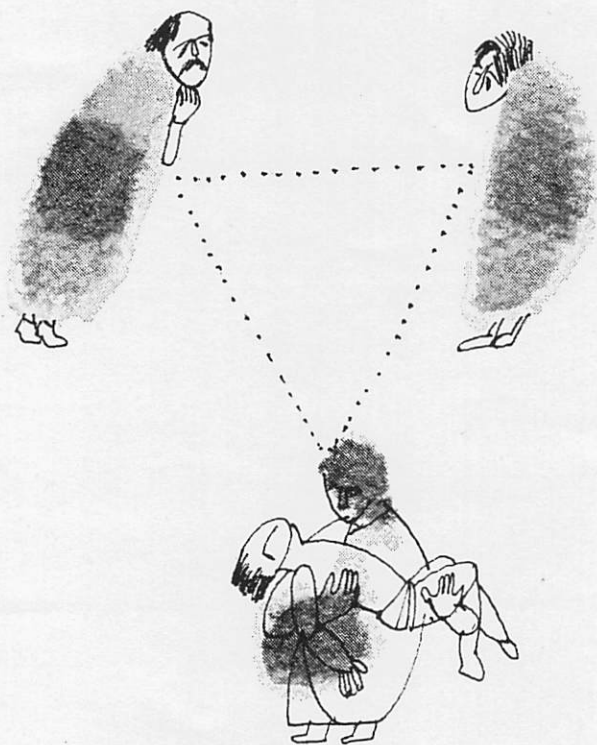
原語（ギリシア語）で——

「ヘニ・トウトーン・トーン・エラヒ
ストーン」

と書いてあるのは見逃せない。文字ど

おりに訳すれば——

「最小者たちのひとり」



人」とあつたのを、ギリシア風に表現したものであろうが、とにかく——

「理屈をいっていないで、どれでもいいから、いちばん重そうなやつを担げ」といわれているような気がする。

ところが、重いものを担ぐのは骨がお

この、頂点をもってきて底点にかさねるといふやりかたが、彼らしい逆説というか、価値観の転倒なのであろう。

頂点志向していけないといっているのではない。大いに励み、大いに精進すべきである。が、その目的は、底点にそれを重ねるときに完成する。

でなければ、

「偉くなりたいと思うものは、仕える人となれ」

「頭となりたいものは、僕となれ」

(マルコ一〇・四三、四四)

とは、言わなかったらう。

これは、東洋の、目当てもない、偽りの謙下とおなじではなかったはずである。

頂点志向としての底点志向——

頂点志向の極致としての底点志向——

頂点志向の完成としての底点志向——

が、よく現れている。

しかし、重い——だから、重い——ということを覚悟しなければいけない。

宝の箱をさがすものが、軽いものより重いのを持ちかえるように、一人で一つしか持ちだせないとしたら、重いもの、重いものを選ぶはずである。

最も小さいもの——だから、最も軽いはずだ——などというのは、とんでもない錯覚である。

また、重いもの一つより、軽いもの二つがよい——というのも、解っていない。

ここでは、数は役に立たない。一つで他の何倍も重いものもあれば、多数のようにならぬ、それだけ薄いこともある。

「ひとり」

というのは、一、二、三……の一ではなく、

「一期一会」——アインマリッヒ

——といったような、永遠に二にならない一ではなかるるか。

彼が

「取税人や遊女が先に神の国にはいる」

(マタイ二一・三二)

といったとき、それが原語では複数になつてはいるが、その要はなかる。彼は、ひとりの取税人（マタイ）と、ひとりの遊女（マリア）のほかに、そう多くの人々に同時にかわつたとは思われない。われわれも、一世一代、ただ一人の最小者と誠実にかかわりをもてば、それでよいのではあるまいか。

数でこなすことが、当代のはやりになつてはいるようだが、そんな迷信にまよわされてはならない。神のまえでは、人間の数をかぞえることさえ罪悪なのである。人間は人格であつて、数字ではない

すなわち、最小者といえども複数であつて、選択に迷うであらうが、そのうちのひとりでもいい——といっているよう。これは、もともと、ギリシア語でなくアラム語だったろうから、セム語の常として、最上級というものがなく。

「はなはだ小さい者どものうちの」

れる。できれば軽いほうで勘弁してもらいたい。おなじ一つにみえるなら、重いものより軽いものを……と尻込みする。だから、

「おれでもか？」

と、神自身がそこへヌーツと顔を出す

のではあるまいか。

キリスト教葬儀のすべて

24時間受付電話

☎03-753-5294

(寝台自動車常備)

都内近県一円のフィニッシュサービス専門店

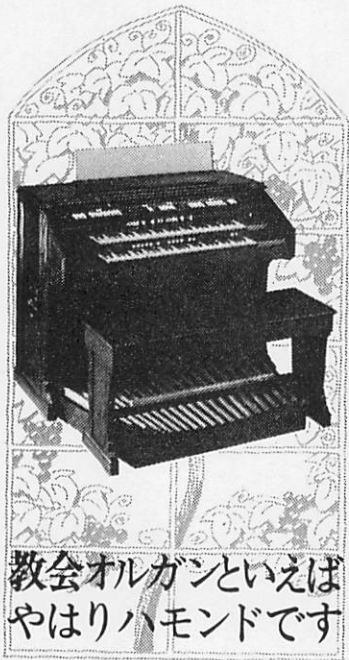
キリ サト 桐里センター

三ツ木 四朗

東京都大田区中央5・8・12

各地教会の作法に従いお世話しております。

HAMMOND
ORGAN



パイプオルガンと、最新の電子技術の結晶、ハモンド・オルガン820。

9つの音の高さをもつハーモニック・トーンバーを組み合わせることにより、無限に近い音色づくりが可能です。プリンシパルをはじめとする充実したストップ群、ハーブやチャイムの効果をつくるパーカッション。ワンタッチでドラマチックに音色を切り換えるピストン・プリセット。どのようなオルガン曲にも対応できる機能を備え、オルガニストの高度な演奏も、オルガン音楽の「感動」をあますことなく鮮かに表現します。パイプオルガンでは不可能な音量調整、残響装置、レスリー効果など、一度ハモンド・オルガンをおたしかめ下さい。

日本ハモンド株式会社

●東日本営業部
〒151 東京都渋谷区代々木2-8-3
新宿GSビル ☎03(370)9481(代)
担当者：河原 博

●西日本営業部
〒530 大阪市北区芝田1丁目4-14
芝田町ビル ☎06(371)7291(代)
担当者：立上邦一

から……。

福祉が、底点志向を失ってしまったとおなじに、宗教も底点志向を忘れた。だから、「偉くなりたいたい」ばかりで、すこしも「仕える」(ディアコネイン)ことをしない。

教会が社会事業をするのは、食うに食えないから……と思いきや、でなければ、宗教の手段としてだという。

宗教者でなければ底点まで行けない、底点においてでなければ神に会えないなどということは考えてもみない。

そして、教祖がせっかく開いてくれた扉をとぎし、その言ったことも、行ったことも、みんなカプセルに収いこんで棚にあげ、それを拜んで、救われるという。

餅をつくれなくなった餅屋が、画に餅をかいて売ろうというふうなもので、誰も買おうとしない。本気にしない。

いくら、もがいても、底点志向を忘れ

た宗教は、生命を失って、枯死するだけである。

それまで、ドグマという、ひけらかしで、わけのわからぬことを並べて、時を稼ぐのもよからう。あれも異端、これも邪説と、ひとを傷つけるのも面白からう。しかし、それで救われるものは一人もいないであらう。△△体験という、おおげさな錯覚以外には……。

それでも、そのドグマを信じて救われたのだ、その体験のみかきかねで宗教がつたわったのだ、在ったものは正しいのではないか——という人はたくさんいる。

ところが、宗教がすこしでも歴史のなかで役立ってきたとすれば、それは

「異邦人の支配者とみられている人々」とともに、

「民の上に権をふるった」

(マルコ一〇・四二)

ことよってではなく、底点志向した

ことよってである。

百年か二百年に一人ぐらいしか出てこない本物の底点志向者が、宗教の歴史を救ったのである。そして、実に皮肉なことに、ほとんどすべて、宗教から追いつかれていく。

この、底点志向と両立できない宗教の性質を、読者は何とみるか？

イエスは、そこを、いたいほど見抜いていたから

「ある人が、エルサレムからエリコに下ってゆく途中、強盗どもが彼をおそい、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま逃げ去った。するとまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った」(ルカ一〇・三〇—三三)

と、作話せざるを得なかった。

祭司やレビ人は、もつとも熱心な宗教家であるにも拘らず、向こう側を通った

のではなく、彼らのもつとも熱心な宗教家であったがゆえに、聖務におくれているまいと、逃げたのである。

これは、宗教家全体に対する最大の侮辱ではなからうか？

彼らは、その他のところでも、くりかえし皮肉られているように、底点以外のところで神に会えると信じきっていた、最大の愚者だったのである。

「隣り人とは誰のことですか？」

と、底点を見失って、さまよっている頂点志向者に、この作話をつきつけたイエスは、

「あなたも行って同じようにしなさい」と結んだ。

それでも、まだ、われわれは、なにか言い訳をするべきだろうか？